



四
四
郷
談
久

196
6

13
196
6



四四郷談卷之六

東都 曲亭馬琴編演

第十二

主のあふ赤繩を結ぶ

侍見渡鳥か百夜の密語

大川



196
6

正永彈正時綱を日なつ浦田へ帰城して義亮朝臣を拜謁し、
 國府臺新城塙の地圖をよせしめ、その錢をりて、
 父えのひ、鐵月取の刀を返し、そまらば、
 進むをええと、委細に及す、あやん時綱は鮮衣が心操を以て汲て、
 素大夫が二巳の才学をりて、洲之助の五を、
 班引おせ、主後三人を、
 矢やぐり、
 矢庭事件の悪棍、
 這奴、

追放される。田子江腕三五井墨太とらふのこ再犯その罪状を尋ねて
 首り共おとすありぬと時宜よく執ほしませしうが義亮感嘆くを
 愉(ガ)かうち急死人みる継橋素大夫を随弱のりのことと織りかけれど此度
 不思議の大功をなす前の罪を償ふも足る。加之その妻その僕主と異て
 賊を撃つ國のため死せしむ。節義勇悍傳罕(ハ)しうくその名を竹簿(ハ)
 らめて後くやでも傳へんこれ近年多病よりて軍畧政務(ハ)たさるるに
 中義弘は任(ハ)さるりぬ。この賞罰のみづから沙汰せしむる素大夫を召(ハ)し
 べとそ殊(ハ)まよ(ハ)しむる時綱(ハ)これよりけりぬ。恥(ハ)命(ハ)を傳(ハ)ふ水行(ハ)
 順(ハ)風(ハ)ありれば往来三日(ハ)たりぬ。素大夫来里(ハ)到(ハ)る。義亮我弘(ハ)
 見(ハ)ませし。近年(ハ)逆旅(ハ)の艱苦(ハ)を勞(ハ)ひ節義(ハ)は死(ハ)する。鮮衣(ハ)亦(ハ)惜(ハ)ま(ハ)せ(ハ)る。と
 大(ハ)く(ハ)る。則(ハ)此(ハ)夜(ハ)の勸賞(ハ)とて本領(ハ)安堵(ハ)の御教書(ハ)とあり。正木時綱(ハ)
 小(ハ)属(ハ)く國府(ハ)基(ハ)る。新城(ハ)を成(ハ)る。旨(ハ)を命(ハ)ず。六(ハ)の日腕(ハ)三(ハ)里(ハ)太(ハ)小(ハ)ら
 竟(ハ)は頸(ハ)を刎(ハ)られ。六(ハ)首(ハ)り共(ハ)櫛(ハ)を(ハ)曝(ハ)へる。か(ハ)し(ハ)後(ハ)は素(ハ)大夫(ハ)
 年来(ハ)他(ハ)に(ハ)交(ハ)り。苗(ハ)頭(ハ)將(ハ)監(ハ)す。祝(ハ)の樽(ハ)散(ハ)齊(ハ)と(ハ)み。その僑(ハ)居(ハ)を訪(ハ)し
 疎(ハ)れものづら。其(ハ)妙(ハ)は集(ハ)令(ハ)と。その高(ハ)運(ハ)を稱(ハ)贊(ハ)す。つづ(ハ)緝(ハ)の(ハ)乃(ハ)体(ハ)曩(ハ)小
 浦(ハ)田(ハ)と追(ハ)れ。時(ハ)久(ハ)似(ハ)る。も(ハ)あ(ハ)る。か(ハ)そ(ハ)や(ハ)月(ハ)下(ハ)る。経(ハ)る。國(ハ)府(ハ)基(ハ)の
 城(ハ)成(ハ)就(ハ)せし。正(ハ)木(ハ)時(ハ)綱(ハ)を摠(ハ)大(ハ)將(ハ)と(ハ)す。苗(ハ)頭(ハ)將(ハ)監(ハ)政(ハ)田(ハ)挾(ハ)丈(ハ)太(ハ)繼(ハ)橋(ハ)素(ハ)大夫(ハ)小
 塚(ハ)の内(ハ)外(ハ)小(ハ)宅(ハ)地(ハ)を(ハ)り。ち(ハ)の(ハ)く(ハ)妻(ハ)子(ハ)を(ハ)推(ハ)つ。その(ハ)れ(ハ)雜(ハ)兵(ハ)夥(ハ)り。愈(ハ)下(ハ)総(ハ)
 赴(ハ)ね(ハ)今(ハ)も(ハ)其(ハ)の(ハ)蹟(ハ)彼(ハ)処(ハ)あり。里(ハ)人(ハ)れ(ハ)城(ハ)山(ハ)と(ハ)唱(ハ)の(ハ)原(ハ)是(ハ)一(ハ)座(ハ)の(ハ)山(ハ)より(ハ)と
 新(ハ)利(ハ)根(ハ)河(ハ)を(ハ)帶(ハ)る。究(ハ)竟(ハ)の(ハ)要(ハ)害(ハ)なり。當(ハ)時(ハ)小(ハ)俵(ハ)の(ハ)大(ハ)軍(ハ)あり。輕(ハ)く
 へりて。ぬ(ハ)び(ハ)三(ハ)び(ハ)ち(ハ)び(ハ)ふ。これ(ハ)を(ハ)壓(ハ)え(ハ)る。じ(ハ)され(ハ)ば(ハ)繼(ハ)橋(ハ)素(ハ)大夫(ハ)の
 中(ハ)宿(ハ)願(ハ)を(ハ)果(ハ)せし。と(ハ)み。鮮(ハ)衣(ハ)績(ハ)る。ぬ(ハ)び(ハ)妻(ハ)を(ハ)娶(ハ)じ。と(ハ)其(ハ)亡(ハ)骸(ハ)小

中宿願を果せしとみる鮮衣績るぬび妻を娶じと其亡骸小

誓ひける唇もすこ乾ぬ。前妻片塊ホらひもく。薄情と責然と速る。
 びりなれば今又阻む。すもくして所容と正未告とあら守へばえ
 めびて又昔縁と結ふれど片塊の餘怨う月散と動されば十介年
 棄られざるも移く青て終く良人よと聞せど欲しむを異妻のひり
 僻ふんとあつても彼婦を忘れざるや墓まりのとせざるんと死
 する人が生てもめが。嗚呼する所行なまひそと罵りて未白華と
 る向ませば悲む下鮮衣の節義よその刃を殺せども墳墓の乱草と埋とて
 争くも狼兔の栖と荒果家窟の蜘蛛の網と囚られと荒糞堆高と積り。
 かは朽くも素大夫の素より女と老れた性よと妻を罵るも毎昔悔と
 のと且愧且とそれと北社位を異せしむその妾の奴婢さどもと片塊不
 所使さるるを敬すの稀と威勢かどのぞかまは片塊のうづのふとの

まふ進止ひ只その兩個の女児の生卒も縁羅と被餉させ振る洗濯
 夜の計目麻うと被せし三たびの飯の数次定め尺一腕の外と行さる情
 るれらふ唐草紅血同胞の扱とて蔑りてさるぬるまでまてとやれ今
 如此くのてとら暴みのか体とていひとかりを告る片塊のふも
 あくむ猶と扱をいひさそとひも釋せど責罵りはははととまのゆれ類と
 扱滅ていやく罵り你かどれ女の童小扱とら名いのとこより紅血が妹ととるれ
 缺血とていひてそ似つらにかぶれとてこれよりちをせしむ奴婢ととる
 名ころりと笑ひつらひ馴と扱と嘔るりのなかけとてまてとてこれを
 処あどこれも早晚化せられて缺血とのまひびらと渡らるこまひら
 せくあもほどとらふ忍ぶと打とれたと限りまればあどのはとらふ
 折その憤と糺と訴いあらるあははらんおほおん子よとらませとて

傍りし夜尺ひと被せまのせ三じの飯も一晩も限らせりあつた
 かじいと憚りあるてあつた実の名どほせまりて缺血さど各づけまら
 外はさうく信らざや母は前よりすまらざるがかくやであのけいじりの
 けい候さうくしてはまを袖は推包めが素大夫の点院のそ人やゆんを
 いふあり対の回答せざればどらうりありていふがひほしその夜さ
 傍り引著て唐草紅雪この衣此彼と相譚へ素大夫さうく便且
 ぼくふれば缺血へ肌をさげん渠あなごて人あみなる夜と被せ
 朝夕の飯も一碗の外食せざらありのありしがとらせも果だ
 目尻氣逆く良人と疾視さのまの継母の僻るさとのこは
 生ぬ子あねがよたがうふよた夜と被せまはけくさるも渠あ
 尿下付らるる昏も下漏るとあれは横浦園のさるも生平の衣裳の解

洗ひも毎日のことなれば措場はけり夜と被せけり略の敷と定め
 らの故は信らざもあんや如此と告ぐるの公親あ愧りやせん
 かつその故とあてばて尺吾俯の悪棍もせくるさるも朽をけ
 敲く敦圍へ素大夫のしもなれたといはると咳はくの中
 多ひらうこの片境も手措らるればこの涙もがたどて缺血
 ららん這奴あぬらうていさる術もがたどて明の辛水
 此夜へ男児ありければ素大夫珠を飲びてこれと小素太郎
 柳沢のちと寵愛を定まりて後まへ小素太郎は冊らね
 けり眼なされど傷の人目をあびくふその徒然と慰ま
 出はるる昔ふはぬ日ありけり是よりまらる天目法
 恩ふ被く素大夫と絶く眉ともせど傷若無人の為体
 一さかの耳目と敬むがせ

素大夫やくりしてあまて渠と真間の別荘に隠居させ小厨をとり使らせり。
 物不足なく養ひしる内村の物の役却多くて三百貫も大なるは妻の
 衣食を費しつるに却人るとなれば鑑一領野寺と奴僕もむろに疏食して
 只女房に役せられ世の胡慮ありにたり。この下六七年が同物なりは。
 光陰矢の如く又梭の如く白駒隙とゆれば二角須臾も止まざり天文もや十のあり
 七年ふなりしる缺血の艱苦の中に人となり。今茲二八の春を迎へ心ぎぬまき
 伶俐容止下へは艶麗なり片境の女見ども渠まいつる芥きりといふにりや
 このやとてこれさへお如くおひく缺血への化粧させ袖を臂まきあつるに裾
 みづらうづり夜の垢づらるるを被せ席薦の山離壁毀れ去処を体杖室と
 彼未通女が平居と定て朝夕の飯などもほろりて齋一室。後母屋へ出
 ると許さばちられども缺血の年九つあり秋やが母鮮衣を教ふるもつた

物よひとらさるなり。徳刺の糸竹のまきむとんとて志すことなく
 就中衣ぬふころ針婦とらつるものも及ざる利るまよたるも只マビ
 とて罵る。継母も我と折るころが也唐草紅の衣裳といふあるがら入推著て
 缺血の縫せらる。これよありて缺血の旦ても暮ても徳刺は雲女時の暖尚
 るは唐草のいゆる天文十五年の春苗頃の監が子畑之進と婚姻するのひと
 今に彼起りありらる。缺血が縫はなうと種衣の被らるころとておのが
 衣裳のとならぶ。そのまの衣さふかろに親家へ遣はる。これ翌年てお
 種せらる。明后日まむとらせらる。その毎遍は片境のみづらうづら
 めて缺血が子舎お赴れけりも苗頃の婿が消息して如此くといひはしり
 さらとも。紅血が夜うちおれ種といふおれ種も此も翌年てふ。三多刺果て
 知らる衣領下の小裂衣いともども。とらうづらしむるなう。綿も秤おかすあり。

解くくは糸一とちでも失りまどい後ぐらいたい譯せどとくちか
 めいなるに睡り轉て針目を走けし好まおされまぶおんむりりのりめ
 付くど唐草を取ぞし吃といふ片耳へ紙栓きして抜くも鳴呼ひ
 がひらの少女やいと憎きげにけれも缺血のあむりも恨はまきま
 悲しく言ひけり及ぬせも推辞とは濃きの傷痛くてあまこら
 人使ひや三百六臂ありとら神さるびば只一夜さふ三四の衣いふと
 刺果多らんすも母の仰あつとも逼る三遍一遍の推辞まらとと
 明く地ぢのうもあふは難我の月づり日未く遍とら限るけれ
 を一缺血の玄冬の雪の夜も埋火のほを暖めあふと八声の鶏をい
 といいと稀之又三伏の夏は日ハ蠅も拂き蚊遣もいせどとよ
 且どつが月ハび一月草のともうらら舊衣は真白肌膚を掩ふの

かちも泥りて素顔愛と夏富士黒白なれ鳥夜の梅の花香も
 ちるあれと夜光の玉もあふ下和足を統よりあ芙蓉もい
 出秘大真がなと比とあふ足ら自然の才とあつと兩夜の月と
 出も水澤中騒ぐ味村の繕とて人もあふ限るもあふ閉執られ
 かくぬ小蟹の蟾子の糸線る纏刺り心も結れいと惚がれ
 片塊の豫る子舎の障子中敷を穿て紅血と込代は間なく
 又あつと今茲僅中七丈ある小素太をおの眼代中と戸は
 りらち俯くもあふと入りもあふとあふその思を責るこ地獄
 異さるに況や時日を限る夜を刺さるこあれは遠りま
 言止すこの故は缺血のあふ死ねるこあ日もあふ
 その緯のあ体あふかかれ放妻とらと痛くあふとあふ

よりのもすもとそが中流多のり人目を竊く夕抱のわん届すて脊次格と
 湯茶あてえ勸まゆそれ將昏の憚の関るあれがゆみ任せと只王蜻の夕去
 本とわおのが臥房と彼子舎とその間近なれば通霄えとらつ或は火の吹蚊を
 追まひいと真成はしつる足も憂苦を慰められてぞくね世は王翹の
 命をたりちろ。不題正未彈正時細の曇る飯沼丁七が早りく自殺せると
 あらふゆいぞ惜らる禄高た武士といふも後世は死をおそれざる渠がゆに
 いと稀く男子あつと尋らふ流多の女の子もなり。但渠が妹の子は在柄
 真吉といふりのあり父の國府の臺のほろつなは新利根の村長なると富
 むもあふはそくもあふも同胞もまらふ彼真吉の幼稚より誰ぞを極ど
 武藝を好みてむるもかへばなまらつて丁七の外任三四人ありといへも
 真吉をの愛しくつが女婿やせんりの渠あふと又さくもまらとく極ど
 よりの流多のりも真吉の中明く地を説く世を里人よまらりのありて時細よ
 告ぐも則るよと足さるるも憑らるるのなれば極く其親を乞て
 家隸よあらりければ吉よと足す時細は仕るともや年来まらるるふ
 今茲ハ廿三歳なりいと真成するののなれば外伯父丁七が狂死を悼み豫と
 いられらるるふ羊を經れども竟も忘れど仇らるる公なる草の絶を流多を
 訪ひし流多の娘くもいと憑らればららる他らるる相譚を推し時と
 その家あてりる共も育ら後兄身とらなるるふ小親の結ひし妹と伎の縁も
 われらるる共よ信の垂氷とらら解とらるる下切の関とられも放せ
 ども又人目の関の戸をよ小超がこれの中あまを立つられつるわもあ
 果り涙の雨障とて雲とらる夜に單なり死片境いとれとの情由を流多らるる
 曉らねと彼社伎のこの地の城主房総第一の執柄する正未氏の家隸のりし

よりの流多のりも真吉の中明く地を説く世を里人よまらりのありて時細よ
 告ぐも則るよと足さるるも憑らるるのなれば極く其親を乞て
 家隸よあらりければ吉よと足す時細は仕るともや年来まらるるふ
 今茲ハ廿三歳なりいと真成するののなれば外伯父丁七が狂死を悼み豫と
 いられらるるふ羊を經れども竟も忘れど仇らるる公なる草の絶を流多を
 訪ひし流多の娘くもいと憑らればららる他らるる相譚を推し時と
 その家あてりる共も育ら後兄身とらなるるふ小親の結ひし妹と伎の縁も
 われらるる共よ信の垂氷とらら解とらるる下切の関とられも放せ
 ども又人目の関の戸をよ小超がこれの中あまを立つられつるわもあ
 果り涙の雨障とて雲とらる夜に單なり死片境いとれとの情由を流多らるる
 曉らねと彼社伎のこの地の城主房総第一の執柄する正未氏の家隸のりし



正木左近

てこみ
おの
あや
赤穂
張

お見名

五五 御言 卷六

波もふ笑へば。むとりつぐとあやう。唐草の父より。祿高く職重た苗頂
 ぬの愛子も。畑之進ゆ嬉し。渠がうの後母と。こころか。ほの紅血の
 年と二十小まう。これと決りん。塔がひなり。正木の大人と家系貴く
 守も手く用ひ。人亦こ且敬ひ。食その下。風ふまんと。顔ふ数万貫の
 主つら。小の子左金を。郎時忠ぬ。守の口舎。義弘朝臣の。陰見よ。せ
 六時綱ぬ。養よりて。年を十八。なりまう。とぞ人。いふ。体。が良人と
 彼大人と。鄙言ふ。いふ。洪。撞。挑。燈。對。揚。ぶ。う。の。あ。は。れ。も。甘。旨。く。謀。ふ。
 紅血。娶。ふ。あ。こ。も。の。り。か。ん。こ。の。よ。ま。が。あ。の。彼。社。伎。波。も。が。後。兄。才。と。て。こ。ら
 家。も。ま。は。る。ら。あ。ひ。び。ひ。ら。た。幸。ら。の。後。小。用。る。こ。の。あ。ん。と。肚。裏。は。深。念。し。う。
 これより。波も。が。志。の。び。く。小。缺。平。使。を。ま。れ。も。外。見。も。又。真。吉。口。が。う。く。ま。て。
 波も。と。ら。か。ら。ら。る。を。願。願。れ。れ。も。後。と。阻。ま。う。と。紅。血。の。う。ら。ま。計。較。を。潜。中。り。ふ

説き。し。緯。の。便。宜。を。い。へ。ん。あ。の。彼。社。伎。と。嫌。始。中。て。如。此。く。の。消。息。を。左。金
 ぬ。入。進。し。じ。り。對。揚。が。た。妹。使。の。縁。し。明。く。地。を。結。し。と。思。ひ。と。う。情。と。連。
 あ。よ。夜。の。敷。ま。う。ぶ。彼。方。より。嫌。始。と。誓。縁。と。淺。ま。う。ぶ。彼。郎。の。京。源。倉。も。
 儻。單。る。風。流。士。の。り。と。い。ふ。身。も。侍。の。り。と。緯。成。と。一。期。の。榮。華。お。う。が
 う。と。い。ふ。ざ。ら。親。の。み。同。胞。の。み。こ。と。い。ふ。ま。う。と。い。ふ。あ。の。波。も。と。ま。押。し。く。
 あ。い。ら。く。ん。ま。う。と。真。吉。で。て。耳。語。は。紅。血。の。板。顔。と。果。敢。し。く。い。ふ。應。と。長。た
 袂。と。膝。の。上。小。思。宜。昔。も。ま。う。ぶ。意。中。の。弊。と。包。ま。か。ひ。う。ま。う。ぶ。ま。う。ぶ。
 日。来。い。い。も。憎。ま。げ。小。責。使。の。り。波。も。小。夫。く。か。つ。れ。密。事。と。念。平。あ。ん
 相。譚。が。う。て。か。う。く。日。と。送。り。ね。と。あ。ん。孫。も。波。も。の。う。ら。の。呵。責。早。晩。お
 忘。る。と。う。の。あ。ん。れ。と。有。敷。主。の。缺。平。久。後。の。と。今。の。艱。難。故。
 あ。い。ら。く。と。真。吉。が。う。の。毎。日。彼。為。体。と。扱。り。て。計。策。を。求。る。は。の。舌。根。不

ありまとも同きまもや傳々上代ありの里まの兒名といひ一賤女ありし
 東國の方言よまごご女子とも見名といふそが実名は傳はるるに
 憐れいと豈妖まうられ懸想するの歎かまも仇うらまうちも靡
 親の結び一誓まのりあつ佛とまのん火を水汲服まを親まははる母
 継しかりれば其を只好くまひる見名まの密まのり如此まのりありと誓
 耳若良人ま告く濡衣を被せしふまかまのりおけりいと涙す悲し
 父まのりく腹まのり村の揚責しる見名まの悲歎まのりて真間の
 入江ま投まのりを里入ホありれまのり墳墓まのり築榎樹まのり栽後竟お禿倉を建
 神と一齊まのりまのり見名明神まのり現万まのり入れ赤人の
 長歌まのり古昔有家武人之倭文幡乃帯鮮替而廬屋立妻
 向為家武勝牡鹿乃真間之手見名之奥柳乎此間登波

聞軒真木葉哉茂有良武松之根之遠久寸言耳毛名耳
 母吾者不所忘又虫磨が長歌あり真間乃手見奈我麻衣
 介青衿著直佐麻乎裳者織服而髮谷母搔者不梳履乎
 谷不著雖行錦綾之中丹裏有齊兒毛妹介將及我望月
 之滿有面輪二如花咲而立有者夏虫乃火之入如水門
 入介船已具如久帰香具礼人乃言時幾時毛不生物乎
 云云と詠まのり推量まのり世まのり有が美人まのりまのりこの時まのり
 しひまのり久しきまのり今幾千年と移るらんそのまのり定まのり人
 まのり徳まのり誰く神と祀まのりまのりまのり日まのり究られ患まのり
 身まのりひまのり昔も今も真間の里まのり苦れ息を継搗波まのり入江
 ても流れ敷まのり煩悩の浪まのり日まのりまのり世まのりまのりまのり

脚言多ひと。いふ声誰とん久直。よふ人も做れ一個の賤婦麻衣。
 裾短よつち折つまよりける綾蘭と斜に翳てま在る眉の初春の神。
 似く西を帯ふるも妙は顔と三月の梅花のてく。風の情も匂ひあげれ。
 妖嬈と芳容空窈窕とは西旅が兵官入るる日編蓬はあつた疑ひ小田が
 禁闕と玉の時珠簾と暮あつた神人うとらひまごころ。あつても同を膳り
 とれば神女頻に嗟嘆しる名告させむが不審もい。怪しくもあらん世あり日の
 憂るのそとらればい。これたは見名の神とまふばや。かゝらん身が
 薄命なる父祖の因果を引ぐ祖父ありは宋素卿の妻と田あ子とのこと
 大御國へ投化りつ。又父を妻と娶りておん身が父の産せし後不明朝なる
 女房いさひはそりて身まらりつ。さうふより宋素卿は不せん不故國へ使し。彼
 地を殺さし。こゝ前妻の祟あり。その餘怨日本見多。素大妻は黄塚と云。

